

自著と
その周辺

ひとりひとりの個性を大事にする にじいろ子育て

著者：本田秀夫

講談社

162ページ

2018年4月19日発行

定価：1,300円＋税

子どもの発達や精神保健は、環境の影響を大きく受けます。だから、児童精神医学は「子育て」と切っても切れない関係にあります。本書は、児童精神科医として約30年診療しながら、子育てや教育について折に触れ考えてきたことを書き綴ったエッセイ集です。

筆者は、2010年の秋から3年半ほど、山梨県に勤めていました。その頃、地元の山梨日日新聞で子育てに関する連載コラムを執筆しないかというお誘いがあり、2013年7月から月2回の連載が始まりました。それから1年もしないうちに筆者は信州大学に移ったのですが、それでもコラムの連載はやめろと言われることなく、今も続いています。この連載は山梨日日新聞のウェブページでも公開していただいております。山梨県内に限らず全国の方に読んでいただけるようになっています。おかげさまで、比較的良好な感想を頂くことが多く、ちょうど連載が100回を過ぎた頃に、その中から41篇を選んで講談社から出版させていただきました。

物事には、普遍的な要素と個別的な要素が必ずあるものです。子育てでも、普遍的に誰にとっても必要なことと、それぞれの個性に応じた個別なことと、両方のバランスが必要だと思います。しかし、近年巷間に氾濫する情報の多くは「どんな子どもでもこのように育てるとよい」という書き方になっているように思います。普遍的というより、画一的という表現の方が正確かもしれません。それを読んだ親たちが、自分の子どもの個性と本当は合っていないかもしれないのに、本に書かれていたやり方を無理に押し付けようとすると、その子にとっては苦痛となり、心の健康を損ねてしまうかもしれません。なかでも、発達にさまざまな特性を有する神経発達症（発達障害）の子どもたちにとって、画一的な子育てや教育の押し付けは、ときにトラウマ体験といえるほどの深刻な影響を及ぼします。実際、そのような理由で心に問題を抱えて受診してきた子どもを、筆者は数多く経験してきました。

そこで本書では、子育てや教育で、すべての親、すべての先生たちが大切にもらいたい普遍的なことを述べるだけでなく、一人ひとりの子どもの個性をしっかり捉えることの大切さや、個性に応じたオーダーメイドの子育てや教育を目指していくための考え方を強調しています。

すべての人たちに共通の普遍的なことの多くは、心の健康に関することです。なるべく多くの子どもたちが、たとえ悩み事や心配事があってもなんとかそれを乗り越えて生きていけるように育ててほしいものです。そのために「強い心を鍛えて育てる」というやり方を想定する親や教育者が少なくありませんが、実際にはそれは適切とは言えません。むしろ、いやなことやつらいことを抱え込まずに人に相談しながら、強くというよりも柔軟にさまざまなことに対処できる方が健康的です。そのような心を育てるには、身近に信頼できる人がいて、いつでも相談に乗ってもらえる、という安心感が重要です。また、何かをやると思うモチベーションや、やろうと思ったことに対する意欲も重要です。本書では、そのような安心感、モチベーション、意欲を育てるための環境づくりや接し方についても述べています。

本書の最大の特徴は、個性を最大限に生かして育てるために必要なことに多くのページを割いていることです。そのためには、ひとりひとりの子どもの好きなこと、嫌いなこと、得意なこと、苦手なことを、色眼鏡なしでよく知る必要があります。子育てにおいても、親や先生の希望や期待を押し付けず、子どもの個性に合わせていくことが重要です。本書を通じて、子どもの個性の多様さを紹介し、ときに事例を交えながら個性的な子育てについて、読者に問題提起できればと思っています。

一般向けの本ですが、産科や小児科医療に関わる先生方にもぜひご一読いただければと思います。型にはまった窮屈で画一的な教育に四苦八苦せず、肩の力を抜いて子どもの個性をよく観察し、楽しく子育てできるような環境が広がることの一助になれば、望外の喜びです。

(信州大学医学部子どものこころの発達医学教室 本田秀夫)

